

中国における国際理解教育の現状と課題

— 小学校教科「品德と社会」を中心として —

蔡 秋 英

(2010年10月7日受理)

The Actual and Problem of the International Understanding Education in China:
The Case of the Subject “Moral and Society” of the Elementary School

Qiuying Cai

Abstract: This paper is aimed to search the actual and problem of the International Understanding education in China through the analysis of the subject “Moral and society”. The result of analysis, the International Understanding education is aimed to cultivate “global citizen” from the global perspective constituted three stages. the International Understanding education formed the contents mainly that: world geography, economics, world heritages, ethnic culture, and the issues of earth. Children set out the themes of learning, and then they learn a lot of activities: collecting and disposition information, imitation, debating, experience, and presentation. However the International Understanding education also still have many problems.

Key words: China, social studies of the elementary school, the international understanding education, the actual and problem

キーワード：中国，小学校社会科，国際理解教育，現状と課題

I. 問題の所在

現代社会では、国際化やグローバル化の進展による、モノ、カネ、人、情報の国境を越えた広がり、深まりとそれによって生じてきた人権、平和、貧困、環境など地球的な課題、多文化共生などの地域の課題が複雑に組み合って進行している。その中で経済の高度発展期にある中国は、現在、世界各国に注目されつつあり、国際影響力も段々増大している。このような社会の変化や時代背景の下で、現在の中国でも国際理解教育が強調されはじめている。特にWTOに加盟した後、中国の社会経済発展はより一層国際的になり、人材育成に関して優れた外国語能力と豊かな科学文化知識や国際理解意識を持つ人材を育成することが学校教育に対して要求されている。こうした中で、現在中国の北京、上海、浙江省などの地域の小中学校では国際理解教育を盛んに取り組んでおり、一定の成果

を上げている。

実は、中国で2000年までに国際理解教育が行われていないというわけではない。建国初期から「文化大革命」にいたるまでの約30年間、「愛国主義教育」と完全に一体化された形で進められてきた「国際主義教育」¹⁾が、国際理解教育の一役として行われた。しかし、この「国際主義教育」は、50年代から60年代の前半は「全国の労働者、団結せよ!」というスローガンに象徴されるプロレタリア国際主義運動、「文化大革命」の間は米ソ両超大国の覇権に対抗する「第三世界」理論など、マルクス主義のイデオロギーと当時の国際情勢を直接に反映したもので、今日の意味での「国際理解教育」とは、まずその目的が異なっていると言える。

では、現在中国ではどのような国際理解教育がどのように行われ、そこにどのような課題を抱えているのか。このような問題意識に基づいて、本稿では学校における国際理解教育を中心とし、まず、諸資料によっ

て国際理解教育の現状を全体的に考察する。次に、2001年以降の小学校カリキュラムや教科書が国際理解教育の視点をどのように具体化したのかを更に詳しく分析する。最後に、考察と分析を踏まえ、中国の国際理解教育の特徴とその課題を整理する。

II. 中国の学校における国際理解教育 現状—3つの形態を中心として—

現在、中国では今世紀に入り改革開放政策の進展の中、WTOへの加盟(2001年)、北京オリンピック(2008年)、上海万博(2010年)の開催に象徴されるように、各分野における外国との関わりが一層緊密になっている中で、国民の「国際意識」の涵養が求められ、教育の分野においても新しい課題として「国際理解教育」の重要性が認識されている。

そこで、中国では世界各国の国際組織の提唱の下に、「国際理解」を理念として行う教育活動を国際理解教育(International Understanding Education)とし、その「国際理解」の目的は異なる文化的背景、異なる種族、宗教信仰と異なる地域、国家、人々との相互理解と尊重を促進し、相互協力を強調し、地球的な社会問題や課題について共同的に認識し解決することができるし、世界に対する認識を通して自己理解と他者理解ができるようにすることであると指摘している。

このような指摘がなされた背景には、1980年代からの改革開放政策の進展と1990年代に入ってからの市場経済の急速な発展、そしてそれともなうグローバル化の浸透である。その影響下で、1990年代ごろから「国際意識」「地球観念」「平和・共生」「文化理解」「相互尊重と寛容」「国際貢献」などの概念が学校のカリキュラムにおいて本格的に登場している。

特に、中国の学校においては1990年代後半から主張が高まった従来の知識編重の「応試教育」から知育、徳育、体育、美育の全面的発達を目指す「資質教育」への改革の動きに伴い、現在は主に次の3つの形態で国際理解教育を行おうとしている。

第一の形態は、既存の教科、特に社会系教科や外国語などの中で、教科目標の一部として国際理解教育の内容を導入した、いわゆる「浸透教育」の形で行われている「発散型」の国際理解教育である。この形態は、教授内容が各教科の中で分散しているため国際理解教育の集中性が欠けているし、その教授活動も従来の伝統的な教授方法の影響を受けやすいなどの問題点が指摘されている。しかし、この形態は学校において国際理解教育を行う際の主流となっているのが現状である。

第二の形態は、2001年の基礎教育課程改革によって、

子どもたちの活動や体験を重視する領域として小学校3学年から高校の3学年まで新設された「総合実践活動」の中で行われている「集中型」の国際理解教育である。

例えば、小学校における「総合実践活動」の教材開発領域(表1)をみると、自然環境問題、社会や歴史的問題、文化理解、地球的課題などといった国際理解教育関連の内容(下線の部分)が含まれていることが分かる。

このような実践活動の取り組みは、主に関連のテーマを取り上げ、各教科の中で学んだ既存の知識を活用しながら問題を探求し解決していくような形で行われている。例えば、環境問題を主なテーマとした「総合実践活動」は、教科「品德と社会」の中で世界範囲での環境問題を把握したうえで、具体的に身近な地域の環境問題の歴史の変遷と現状についての調査研究活動を行う。また、これらの活動を教科「国語」の「インターネット上の交流」という活動や教科「科学」の「水質汚染の原因に関する調査」などの活動と結びつけながら展開する。その中で、教科「科学」で学んだ知識を生かして環境問題の解決策などを提案し、教科「芸術」の中ではその活動の成果を表現する。そうすることによって、一つの領域での実践活動を通して、既存の知識を多面的に活用することができるし、また多方面での教科活動の一つの実践活動を通して統合することができる。よって、子どもたちはより深く新たな知識や技能を再構築していくことができる。

表1 小学校における「総合的実践活動」の教材開発領域

領域	具体的な例
<u>自然環境問題</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水土流失 ・ 気候の影響 ・ 植物の被覆 ・ 水資源の状況 ・ ゴミなど総合的な環境問題等
<u>社会問題 及びその 歴史と現実</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工農業生産問題 ・ 交通問題 ・ 世界文化遺産 ・ 中国と世界の経済及び文化生活等
地域社会での活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宣伝活動 ・ ボランティア活動 ・ 文化・体育・娯楽活動等
<u>伝統的文化</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の伝統的文化 ・ 中華文化と世界各民族の文化等
公共施設や設備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館、博物館 ・ 革命聖地、歴史遺跡 ・ 政府と社会機構など
<u>地球的課題</u>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地球的課題や問題に関心をもち、その解決のために様々な情報・技術やメディアを活用する。

注：教育部『総合実践活動の指導要領(意見稿)』2001年、により作成。(下線部は筆者による)

表2 北京市における国際理解教育カリキュラムの総目標と考え方

	学年	中心概念	関係概念	育成しようとする能力
総目標				①自国文化を理解したうえで、他国の歴史、文化、社会的習俗などの発生、発展と現状について理解する。 ②他国の人々と交流する能力を高め、他国の行為規範を身につけ、人類の共同的価値観を持つ。 ③他国の政治、経済の発展状況及びそれらがわが国の発展にもたらす影響を正しく分析し、予測することができる。 ④経済的競争と協力、生態環境、多元文化的共存、平和と発展など地球的な問題を理解し、正しく解決できる。 ⑤民主と平和を愛し、人類の共同的な発展に関心を持ち、善良で、公正で、聡明で、私心のない「地球的市民」を育成する。
小学校	4年	世界の文化の多元化	差異、寛容	①基本的な表現力、コミュニケーション力 ②資料を比較し総括する基本的な能力
	5年	民族文化の誇り	尊重と交流 民族性と世界性	①表現力、コミュニケーション力 ②資料を比較し総括する能力 ③資料を収集、整理する基本的な能力
中学校	7年	相互依存と共存共生、平和の発展	尊重と交流 競争と協力 独立と依存	①資料を収集、整理する能力 ②情報を分析、仮説、判断する基本的な能力
	8年	相互融合する文化的伝統	受容と本国化 融合と創新	①資料を収集、整理、活用する能力 ②情報を分析、仮説、推理、判断、応用できる能力

表3 北京市における国際理解教育カリキュラムの各単元の内容

	学年	第一単元	第二単元	第三単元	第四単元
小学校	4年（上）	あいさつと交流	都市のシンボル	切手と紙幣	相違点と共通点
	4年（下）	京劇と歌劇	中国医学と西洋医学	悠久の神話世界	人類共通の理想
	5年（上）	海外旅行	中国にいる外国人	礼儀の国-中国	笑顔が必要な世界
	5年（下）	科学者と科学	オリンピック志願者	地球の中の握手	民族的なもの世界的なもの
中学校	7年（上）	交響楽と民間音楽	中国画と油絵	人類歴史上の光と悲劇	人類の共同遺産の保護
	7年（下）	人類遺伝子の研究	クジラ漁と国際条約	技術の役割	後世に生存の空間を残す
	8年（上）	春の物語	海外の華人たちの願い	小さくなっていく地球	交流の中で世界に向かう
	8年（下）	外国人の目からみる中国	世界公民	国連大会	共同的規則

第三の形態は、地方や学校の中で国際理解教育関連のカリキュラムを開発し、更に「国際理解」という教科を新設して行われている「特殊型」の国際理解教育である。ここでは、北京市が2004年に開発した国際理解教育カリキュラム²⁾を事例として考察してみよう。なお、このカリキュラムの総目標と考え方、各学年の単元の内容をまとめて示したのが上記の表2と表3である。これらの表2と表3からみると、北京市の国際理解教育には以下の特徴があることが見て取れる。

まずは、多元、共存、人権、変革、責任といったような概念をキーワードとして、現実生活と緊密に結びつけながら、その中になる問題を総合的に取り上げ、分析し解決することができることを重視しようとしていることである。

次に、小学生や中学生の発達段階に応じて、敏感な政治、経済的な問題を直接に取り上げず、「異なる多元文化→文化の誇りと尊さ→文化の寛容と尊重→普遍的な価値を持つ文化要素」のような流れで、「文化理解」

を手かがりとして、それらの文化的現象を分析、探求することを通して政治、経済の根源を探るように工夫していることである。

最後に、学習者が主体として、情報や資料を収集し、分析し、整理し、活用することができるような能力の育成を重視していることである。

以上の特徴を持っていながらも、礼儀の国、中国の絵、医学、京劇などといった中国文化理解に関する内容が所々で含まれていることが見て取れる。ここから、愛国主義、自国理解中心、国情（国家の政治、経済、文化などの事情）理解などが中心とし、中国の伝統を重んじていることがうかがえる。

それ以外にも、国際理解教育を全国のより広い範囲で広げるために、研究者たちは国際理解教育モデルやカリキュラムの構築を試みている。その一例として示したものが表4³⁾のとおりである。

この表4からも分かるように、現在中国では世界的な相互依存、自国文化と他国文化に対する理解と尊重、

表4 中国の国際理解教育カリキュラムの構造

構造	目的	主要内容
A 国際理解教育の基礎	異なる文化に対する理解と尊重の態度を育成し、「地球市民」意識と国際的資質を育てる。	・人と交流する基本的技能を学ぶ ・世界の基本問題（平和と発展問題、生態環境問題等） ・国際機構と平和の維持 ・他国の文化生活に対する理解 ・多文化の共存 ・世界の相互依存関係 ・国際交流と協力
B 中国の事情と特徴	民族の自尊心と誇りを持ち、自国文化の理解に基づいて、他国の人々と仲良くして平等的に交流し、民族の平等意識と團結協力の精神を持つようになる。	・中国の国情（事情） ・中国の伝統文化及び世界文化における役割 ・近年、中国の国際的地位の上昇 ・中国と世界各国の交流と協力
C 学習方法	自尊自重する（強い自尊心を持つこと）とともに、全面的に発達した人格の形成と世界を正しく認識し、地球的問題を正しく分析し解決する能力を高めるようにする。	教授活動において、新課程標準で提唱している自主的学習、探求学習、協同的学習などを取り入れる。
D 学校、地域との連携	各地域の特徴に結び付け、子どもたちの現実生活と密接にかかわる問題や課題を取り上げ、実際の生活の中で国際理解を体験することを重視する。	

更に平和教育、命の教育、国内の少数民族に対する理解教育、海外に対する基礎理解の教育などに加え、国民統合を目指す中国特色としての愛国主義教育の内容も多く含まれていることが見て取れる。しかし、「地球市民」としての意識と資質の育成、地球的な問題を解決できるような能力の育成などを重視していることからみると、1970年代までの「国際主義教育」とは明らかに主旨を異にする国際理解教育がカリキュラム編成原理の一つとして浮かび上がっているといえよう。

これまで国際理解教育の3つの形態を取り上げ、その現状について述べてきたが、国土も広く、発展レベルも不均衡でグローバル化への取り組みも地域差が大きい中国であるため、国際理解教育に対する解釈やその取り組みももちろん多様であろう。

以下では、3つの形態の中で主流として行われている第一の形態、教科の中で行われる国際理解教育の実態について更に詳細にみていきたい。なお、本稿で分析対象として取り上げる教科は、国際理解教育がカリキュラムを支える重要な一つとして確立されている小学校教科「品德と社会」である。

もちろん、この「品德と社会」に限らず、他の国語や芸術などの教科でも「多様な文化の尊重」「人類の優秀な文化の吸収」「異なる文化の理解」などが挙げられている⁴⁾ ことに関してはまづ指摘しておきたい。

Ⅲ. 教科における国際理解教育の実態 —小学校教科「品德と社会」を事例として—

ここでは、2001年から始まった基礎教育課程改革により新しく生まれた諸教科の中には、国際理解教育の視点がどのように現れているのかを具体的にみていきたい。

1. 教科「品德と社会」の考え方

「品德と社会」の内容とその構成は、「道徳と社会性の形成は子どもたちの生活に対する認識と体験及び感性に基づく」という観点から「子どもたちの生活に近寄り、彼らの要求を反映し、彼らが自分の世界から出発して自分の視線で社会を観察し、自らの心で社会を感受し、自らの方法で社会を研究できるように構成されなければならない⁵⁾」としている。ここで、子どもたちの生活する領域は、家庭から学校、故郷（地域）、祖国を経て世界へと広がり、そのような生活領域の中の子どもたちの社会生活は、図1のように、社会環境、社会活動、社会関係という三つの要素によって構成されているとしている。つまり、子どもたちの道徳と社会性の形成は、その生活領域が徐々に拡大されていく中で、社会生活を構成する各要素の相互作用によって成し遂げているのである。

また、「品德と社会課程標準（日本の学習指導要領に当たるもの、以下「課程標準」と略す）」によると、本教科を構築する基本的な考え方として、「一つの線」「面と点の結合」「総合交差」「螺旋状の上昇」が挙げられている。ここでいう「一つの線」とは子どもたちの基本的な社会生活を「線」とすること、「面と点の結合」とは徐々に拡大する子どもたちの生活領域という「面」とそれらの社会生活を構成する3つの基本要素（社会環境、社会活動、社会関係）という「点」と

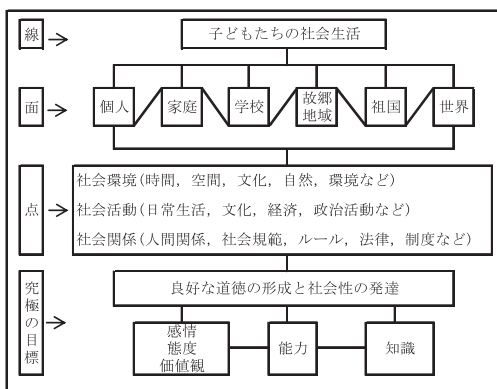


図1 教科「品德と社会」の構造及び考え方

の結合のことを指している。そして、「総合交差」と「螺旋状の上昇」は、教育内容の取り扱う生活領域と社会要素は総合的なものであり、相互交差ができるし、取り扱う内容の重複もできるが、そのレベルは家庭から世界まで螺旋状に上昇するということを意味する。つまり、子どもたちの生活領域は、家庭、学校、故郷（地域社会）、祖国、世界という順に拡大していくものと想定され、取り扱う内容も中学年では「家庭」「学校」「故郷（地域）」を中心とし、高学年では「祖国」と「世界」に関する内容の割合が高くなっている。

2. カリキュラムからみる国際理解教育の内容構成

「課程標準」からみると、「品德と社会」の教科目標は総目標と具体的目標（「態度・感情・価値観目標」「能力目標」「知識目標」）の二次元目標からなっている。総目標は「子どもたちの良好な道徳の形成と社会性の発達を促進し、社会を知り、社会に参加し、社会に適応し、思いやりと責任感、良好な行動習慣と道徳的資質を持った社会主義にふさわしい公民としての基礎を培うこと⁶⁾」と示されている。また、具体的目標をまとめたのが以下の表5のとおりである。

表5の目標からわかるように、総目標には国際理解教育に関する項目はほとんど見られない。しかし、具体的目標からみると、「感情・態度・価値観目標」では「異なる国と異なる人々にみられる文化の違いを尊重し、開放的な国際意識を持つ」こと、「能力目標」では「他人の意見をよく聞き、他人と平等に交流し協力することができる」こと、「知識目標」では「人類が直面している共通の課題を理解する」「世界発展史上の重要な知識を得る」「異なる文化的背景を持つ人々の生活様式と風俗習慣を知る」「異なるグループ、民族、国家間の平和共生の重要性を理解する」⁷⁾のように国際理解教育に関する目標が具体的に示されている。

では、このようなねらいを、どのような内容を取り上げることで、達成しようとしているのか。以下では、「課程標準」に示されている内容基準について考察していきたい。

「課程標準」によると、「品德と社会」の内容領域は「成長する私」「私の家族」「私の学校」「私の故郷（地域社会）」「私は中国人」「世界に向かって」のように六つの領域からなっている。ここからみると、このような区分は前述した「家庭」「学校」「故郷（地域社会）」「祖国」「世界」という子どもたちの生活領域と明らかに対応しようとしたことがうかがえる。

では、国際理解教育に関する内容がどのように設定されているのかを具体的に考察するため、国際理解教育に関する内容と関わる「世界に向かって」の内容領

表5 教科「品德と社会」の具体的目標

種類	目標の内容
感情態度価値観目標	<ul style="list-style-type: none"> ・命を愛し、生活を愛するなどの面での態度 ・生活の中で必要な良好な資質 ・社会生活に参加する民主、法律意識と規則に従う意識 ・愛国主義感情と国際意識 ・自然を愛し、環境を保護する意識
能力目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自己認識、自己保護、自分のコントロール、良好な生活習慣などの面での能力 ・他人との交流と協力、集団生活への参加などの面での能力 ・社会現象とモノに対する観察、認識、分析、社会問題解決などの面での能力 ・情報の収集、整理、分析、活用などの面での能力
知識目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身、他人や社会との関係 ・生産、消費、生活との関係 ・人間と自然、環境との関係 ・中国の民族、歴史、文化、建設など ・世界歴史、文化、交流など

注：中国教育部『品德与社会課程標準（実験稿）』北京師範大学出版社、2002年、pp.5～6により訳して作成。

域を、その内容設定の基準と教授活動の提案という両面から示したのが次頁の表6のとおりである。

表6からみられるように、国際理解教育に関する内容は、①世界地理知識、②世界の文化遺産、③世界民族の文化、④日常生活用品からみる世界の経済、⑤科学技術、⑥環境問題、⑦平和問題、⑧国際機構の役割など、八つの部分から設定されていることが分かる。そして、教授活動の提案からみると、このような学習はテーマを選定、設定したり、関連の写真や資料を収集、整理したりする活動や模擬活動、論争活動、体験活動、表現活動などの様々な活動を行うことを求めていることがうかがえる。

3. 教科書の全体構成からみる国際理解教育の内容

ここでは、人民教育出版社版教科書「品德と社会」（3学年から6学年まで全8冊）を取り上げ、国際理解教育に関する内容構成について更に詳しく考察を行っていきたい。なお、全8冊の教科書の単元名のみを示したのが次頁の表7のとおりである。

表7で見られるように、教科書がカリキュラムの「総合交差」「螺旋状の上昇」を原則としているため、「祖国」と「世界」に関する内容は特定の学年に偏っておらず、主に5、6学年を中心に配列されていることがうかがえる。特に、前述の表6で示した国際理解教育の内容（八つの内容基準）と対応している網掛け部分をみると、教科書の全体構成において国際理解教育の内容が占めている割合は高くはないが、主に6学年に集中されていることが分かる。

そこで、6学年の教科書（上、下の2冊）に焦点を置いて、上巻の第4単元「世界を漫遊する」、下巻の第2単元「人類の生活空間」と第3単元「世界と共に生活する」を取り上げ、それぞれの学習内容をまとめ

表6 内容領域「世界に向かって」における内容選定と教授活動

内容の基準	教授活動の提案
①世界の陸海分布及び地形に関する基本的常識を知る。 (世界地理知識)	①世界を漫遊する模擬活動を行う。
②人類の文明遺産を知り、世界歴史文化に対して興味を持つ。 (世界文化遺産)	
③諸外国の異なる生活習慣と伝統的祭、服飾、建築、飲食などの文化を比較し、多様な文化の差異と豊かさを知り、異なる民族と文化の創造性を尊重し鑑賞する態度を持つ。 (世界民族の文化)	③グループに分けてテーマを設定し、ある国や地域の特色ある生産、生活様式に関する資料(写真、切手、はがきなど)を収集し整理し、クラスで発表する。
④日常生活用品から世界経済の発展と連帯性を感じ取る。 (日常生活用品からみる世界経済)	
⑤科学技術と人類発展の関わりを知り、科学的精神と態度を持つ。 (科学技術)	⑤人類の生活における科学技術のプラス面とマイナス面の影響についてのテーマを選定し、論争活動を行う。
⑥環境の悪化、人口の急速な上昇、資源の欠乏は世界が直面する共通課題であることを知り、人と自然、人と人との平和共存の重要性を理解する。(環境問題)	⑥グループに分けて環境問題に関する異なるテーマを設定し、関連資料を収集し、新聞や掲示板を作って、校内で展示する。
⑦平和の大切さと人類にもたらした戦争の結果の理解し、平和を愛する。(平和問題)	⑦戦争の結果を表す図表や資料を収集し、平和を願う世界人々の思いを体験する。
⑧我が国が加入した国際組織を知ることを通して、国際機構の役割を理解する。(国際機構)	⑧国連、国際オリンピック委員会、国際赤十字委員会など国際組織の活動に関する写真や資料を収集する。

注：中国教育部『品德与社会課程標準（実験稿）』北京師範大学出版社，2002年，pp.15～16により訳して作成。なお、（ ）内と下線部は筆者による。

表7 教科「品德と社会」の全体構成

巻	単元	単元名			
		3学年	4学年	5学年	6学年
上巻	1	家庭、学校地域社会	命を大事に	誠実と信用	文明に向かって(⑤)
	2	学びの中で成長する	安全な生活	民主生活	屈服しない中国人
	3	ルールを知る	お金使いの学問	祖国の山水を愛する	勢いよく走る祖国
	4	私の役割と責任	他人へ思いやり	大家族である多民族国家(③)	世界を漫遊する(②, ③)
下巻	1	温かい「愛」の下で	私の故郷	成長の喜びと悩み	私とともに
	2	仲良く共存する私たち	生産と生活	根源を知ろう	人類の生存空間(⑥, ⑧)
	3	私たちの生活に必要な人々	交通と生活	魅力のある中華文化	世界とともに生活する(④, ⑦, ⑧)
	4	道を探すことと道を歩くこと	情報と生活	私たちの生活している地球(①, ③)	さようなら、私の小学生生活

注：課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第三学年（上巻、下巻）第四学年（上巻、下巻）第五学年（上巻、下巻）第六学年（上巻、下巻）人民教育出版社，2003年より作成。（ ）内の数字は『品德与社会課程標準』の「世界に向かって」の内容基準と対応したものである。

たのが次頁の表8である。表7と表8から内容の取扱いについてみると、以下のような特徴が読み取れる。

まず、テーマが優先され、それに対応する形で国や地域が選定され、扱う内容も宗教、服飾、祝日、建築、食文化へと多様化していることである。

次に、日常生活用品などといった子どもたちの生活体験に基づいた具体的な事例を取り上げ、国際的な相互依存関係の理解を強調しようとしたこと、更に、従来の「マルクス・エンゲルスと共産主義学説」のような内容が消え、世界の文化遺産や環境、資源、平和などといった人類が共有すべき地球的な問題や課題が多く取り上げられていることである。

最後に、これらの学習を通して、最終的には世界的な視野に立って国際社会に関心を持ち、問題解決に積

極的に取り組む「地球的市民」を育成することである。

それ以外にも、特に56個の少数民族からなっている多民族国家としての中国において、多民族性の取り扱いにも注目する必要があるだろう。そこで、「課程標準」からみると、基本的に「統一された多民族国家」「異なる民族の生活習慣と風土人情」「異なる民族の文化に対する理解と尊重」という3つを基本的枠組みとしている。そのほかにも「異なる地域の違いを理解し、その違いが人々の生産と生活に与える影響について理解する」「社会の公益活動について知る」「障害者など不利な立場に置かれた人々に対する思いやりと愛、尊重の心を持ち、支援を努める」などのような内容も加えられている。つまり、「民族」という枠を超え、障害者など不利な立場に置かれた人々への配慮などのよ

表8 教科「品德と社会」における国際理解教育関連の内容—第6学年を中心に—

単元名	単元目標	学習テーマ	キー概念	主な学習内容
世界を漫遊する	尊重と寛容の態度をもって隣国の文化、世界の有名な文化遺産について理解することを通して、世界文化について興味関心をつよようにし、国際的視野に立つ中国人を育てる。	祖国の周りを観察する	地理的差異	中国の国土、文化に関する理解を踏まえ、隣国であるアジア諸国（インド、シンガポール、モンゴル、日本、ネパール、タイ、インドネシア、韓国）の地理的特徴、服装、建築、飲食、歌舞などの面の文化習俗、古代から現代に至るまでの我が国の政治、経済、文化などの面におけるアジア国との交流について知ることを通して、各国の地理的・文化的差異を理解し、政治、経済、文化などの面における我が国とアジア諸国との交流の状況を理解する。
		世界一周の旅行	世界文化遺産	エジプトのピラミッド、古代ギリシャの美しい昔話やオリンピックの由来、古代都市のパリ、国際大都市のニューヨークなどを取り上げ、西洋文化や芸術について理解する。
		文化の風采	人々の生活風俗	世界各民族の信仰、文化習慣と多彩な祭などを取り上げ、多種多様である世界の伝統的な世界文化について理解する。生活の中の礼儀をテーマとして、その中にみる生活風俗の差異などを理解する。
人類の生存空間	地球的共通問題である環境問題を理解し、環境保護意識と社会的責任感を形成する。	たった一つの地球	環境問題	地球は人類のために何をしたか、地球とは何か、人類は地球のために何をしたのかという問題意識に基づいて、現代社会が抱えている三大地球の問題、人口問題、環境問題、資源問題について理解する。
		地球のためにできること	問題の解決	日常生活と環境とのかかわりを通して、環境問題を解決するためにはどうすればいいのかを、主に森林問題、水の節約、ごみの汚染問題などを中心として考える。
		災害に直面したとき	災害問題	人類がコントロールできる災害（火事など）とできない災害（地震、洪水など）を取り上げ、災害に関する基本的知識と対策方法などを理解する。
世界とともに生活する	世界的に直面している平和と発展問題及び世界の人々との相互依存と交流について理解する。	戦争の中での苦難	戦争問題	世界の児童からみる戦争、歴史からみる戦争、長期的な危害からみる戦争という三つの角度から戦争がもたらした災難を理解する。
		平和の鳩を放す	平和問題	国連の成立の背景、仕事、円卓会議の象徴的意義、国際社会における中国の役割などについて知ることを通して、平和を愛する様々な表現方式、活動などについて理解する。
		手と手をつなぐ	発展問題	日常生活の中、経済のグローバル化、科学技術の相互交流などをテーマとして、国際社会に関心を持ち、中国公民だけでなく、「地球市民（公民）」としてのグローバルな意識や資質を形成する。

注：課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会』第六学年（上巻、下巻）人民教育出版社、2003年より作成。

うにより広義的かつ多面的に内容を捉えていることが分かる。

4. 単元構成からみる国際理解教育の方法

表9は、6学年の単元「人類の生存空間」の展開過程(一部)を、教師の教授活動と子どもの学習活動という二つの面から示したものである。

本単元は人類の生存空間を手がかりとして、人類と地球との関わりを考えさせるために3つのテーマから組織されている。

まず、テーマ「たった一つの地球」では、人類の生存空間においてたった一つの地球が、環境の悪化、人口の増加、資源の欠乏などの三大問題に直面していることを認識したうえで、身近な所である故郷の生態環境問題を取り上げ、社会調査やレポートを書くなどの

ような活動を通して、環境問題に対して解決策を考えていく。そうすることによって、子どもたちは地球や自然を愛し、環境保護意識や社会的責任感を持つことができるようになり、探求力、自主的な問題解決力などといった能力を身につけていく。

次に、テーマ「地球のためにできること」では、日常生活の中における自分たちの消費行為を調べ、このような行為は地球にどのような影響をもたらすのかを理解し、「水の節約」と「ごみ問題」を取り上げ、私たちは地球のために何ができるのかを討論する活動を行う。このような学習活動を通して、環境保護意識と社会的責任感、自分の能力に応じた環境保護活動に積極的に参加する態度を形成することができる。

最後に、テーマ「災害に直面したとき」⁸⁾では、こ

表9 教科「品德と社会」における第6学年（上巻）の第2単元「人類の生存空間」の目標と展開過程（一部）

単元目標	1. 地球は人類のために何をしたかを理解することを通して、地球は人類のたった一つの生存空間であることを理解し、地球を愛する態度を育成する。		
単元目標	2. 環境の悪化、人口の急速な増加、資源の欠乏などといった世界が共通的に直面している問題を取り上げ、人類と自然との関わりを理解し、たった一つとしての地球の重要性を感じ取る。		
単元目標	3. 環境問題に関心を持ち、環境保護意識と社会的責任感を形成し、自分の能力に相応する環境保護活動に積極的に参加する態度を育成する。		
主題	活動テーマ	教師の教授活動	子どもの学習活動
たった一つの地球	地球の貢献について知ろう	<ul style="list-style-type: none"> 地球の生態環境の豊かさを表すビデオや写真を提示する。 教科書にある水、森林、鉱山資源に関する事例を提示する。 自分の生活においてなくてはならない資源を考えさせ、地球が人類の生存と発展に提供している条件について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人類の生存と発展に空間と資源を提供する地球の貢献を感じ取る。 自分の衣、食、住やレジャー生活などと結び付けて、地球が私たちに何を提供したかを話し合う。 自分の衣、食、住などの生活において離れられない資源を発表する。 それらの資源を分類し、地球が人類の生存と発展に提供している条件について話し合う。
	地球は人類に対してたった一つであることを論証しよう	<ul style="list-style-type: none"> 地球以外の衛星に関する基本的状況（温度、水分、酸素など）に関する資料を収集し、子どもたちに配る。 私たちは地球以外の人類の生存空間を創ることができないのかという問いをかける。 「生物圏2号」という実験基地の状況について紹介する。 討論の内容をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地球以外に人類が生存できる衛星がないかを討論する。 資料を収集し、弁論会を行う。 大胆に仮説を行う。 相手の仮説に質疑を持ち、弁論する。 地球以外の生存空間はないことに気付く。 討論会に参加した後の感想を発表する。
	地球の健康について調べよう	<ul style="list-style-type: none"> 人口問題、資源問題、環境問題に関する3つのテーマを出して、各グループに一つずつ選択させ、関連の資料や図表を調べるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれのグループは、どのような問題があるかについて資料を収集、整理し、表をつくってまとめる。
	討論会を行おう	<ul style="list-style-type: none"> 各グループが調べた資料に基づいて、討論会と発表会を行うよう準備をする。 調査のまとめなどについて指導を行う。 発表内容について討論させる。 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれのグループは更に二つのグループに分けて、担当した問題のいい所と悪い所について討論し、発表し、その結果をまとめる。 各グループは、まとめたものをクラス全体で発表する。 発表したものについて質疑を出したり、反駁したりしながら弁論を行う。
	故郷の環境問題を考えてよう	<ul style="list-style-type: none"> 自分の知っている故郷の環境問題について発表させる。 発表内容の中で、調査しやすい環境問題をテーマとして選ぶようにする。 選んだテーマに関する資料や写真などを適当に援助し、調査結果をまとめるように指示する。 調査結果を発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分が調べた資料や図表に基づいて、自分の故郷にはどのような環境問題があるのかを発表する。 グループに分けて、それぞれ興味のある問題を選ぶ。 みる、聞く、調べる、問う、撮影する、実物の収集(例えば汚染した水を取る)などのような方法やルートを通して、地域の中に入って調べ活動を行う。 調査結果を分析したり、図表でまとめたり、レポートを書いたりする。
地球のためにできること	私たちの生活と資源環境	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の提案に基づいて、家庭の中の資源の消費状況について調べさせる。 調査結果を集計させる。 提示した集計データに基づいて、平均値を出す。 資源の消費行動が資源環境にどのような影響をもたらすか、それはなぜかについて考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭の中での消費状況について調査を行う。 グループに分け、調査結果を発表し、グループごとに集計を行う。 各グループの代表者は集計結果を黒板に提示する。 提示した内容に基づき、比較しながら討論し、共通点と相違点を見出す。 このような結果の原因を考える。
	大自然の緑を守ろう	<ul style="list-style-type: none"> 水土流失、砂漠化などを反映したビデオ、写真などを調べ、提示する。 このような環境の悪化は人のどのような消費行動から来るのか、どのようにすれば解決できるか、地球の緑をどう守るか、などの問いを出す。 発表内容を黒板に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 映像を見ながら、提示した問いについて考える。 自分の考えを皆で発表する。 黒板の内容を、まとめ、どうすればいいのかについて計画を立て、発表する。 その中で優れたものを手紙、インターネットなどの手法で、調査報告書を関連部門に送る。
	節水型社会を創ろう	<ul style="list-style-type: none"> アンケート調査票をつくる。 結果を発表させる。 発表結果をまとめ、いちばん適切な方法について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の中で、水の消費量、水道代、節水方法、節水における責任などについて調査活動を行う。 写真や図表、紹介、講演などの方法で、節水方法を紹介する。 様々な節水方法の中で、自分にとって最も適切な方法を選び、家庭の中で実行する。
	ごみを減らそう	<ul style="list-style-type: none"> ごみの汚染による世界の重大な事件を紹介する。 ごみに関する4つの問い(ごみのリサイクル、影響、量、解決策)が書かれてあるカードを出して、グループの体表者にくじ引きをさせる。 ごみ汚染のない社会について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 紹介を聞きながら自分の行動を振り返る。 思い出した行動を無記名でカードに記入する。 一グループ一枚ずつくじを引く。 各グループは「ごみ汚染のない社会を目指す」ための生活様式と生活環境について想像する。 自分の描いた「社会」を展示し、その中で最も優れたものを校内に展示する。

注：課程教材研究所編、義務教育課程標準実験教科書『品德と社会 第六学年（下巻）教師教学用书』人民教育出版社，2005年，pp.33～49より作成。下線部は筆者による。

れまで中国と世界の中で起こった重大な自然災害、例えば、地震、洪水などを事例として、その影響や、災害に遭った時の自らを救い、お互いに救う方法などについて資料を調べたり、お互いに話し合ったり、討論したり、ロールプレイングしたりするような活動を通して、災害に対する対処方法について学んでいく。

以上のことから、子どもたちが様々な世界の問題に関する内容を理解するために、資料の収集、整理、自主的な探求や問題解決など様々な活動(表9の下線部)を取り組んで、その中で地球的な諸問題や課題を見出し、思考し、解決にまで至っていることが分かる。

つまり、国際理解教育の学習方法は自ら問いを立て、問題に気づき、問題の背景となる原因や仕組み、構造などを理解し、問題の解決への行動を行う問題解決的な学習、探求学習、自主的学習、協同的学習といった、いわば、国際理解教育の学習内容と方法を統一的に保証できるような「為すことによって学ぶ」「活動を通して学ぶ」方法をできるだけ多く活用しようと工夫していることがうかがえる。

IV. まとめ—中国の国際理解教育の特徴と課題—

これまで中国における国際理解教育の現状と、学校教育におけるその実際について考察と分析を行ってきた。それを踏まえ、中国の国際理解教育の特徴を以下の3点にまとめることができる。

第一に、国際理解関連の内容の配列が、「領域中心型」ではなく、単元のテーマを設定する必要に応じて取り上げる国や地域が選定された点である。こうした編成方法は、比較の視点から設定されたテーマへの理解を深めることができ、本国文化の理解と他国文化の特性をよりよく把握できるのに役に立つと思われる。しかし、一方では子どもたちに外国の歴史、社会、文化などに関する系統的な知識を獲得させることに難しさが潜んでいると考えられる。

次に、「隣国」という視点を取り入れ、アジアを中心とした近隣諸国と地域を重点的に扱った点である。例えば、「アジア」という概念を全面的には出していないが、「隣国」という視点を導入することによって、隣国に関する情報を確保しようとしている。このような方法は、教育内容の選定における「欧米中心主義」の傾向を克服しようとした点においては評価できよう。

また、70年代までのイデオロギー的「国際主義教育」とは大きく異なる特徴の一つとして、特に取り上げたいのは「文化理解重視」の視点を多く取り入れていることである。即ち、国力の強弱、世界政治における力

関係などの視点でなく、異なる地域に生きる人々の信仰、伝統、芸術、建築、道徳、習慣など生活状況や生活様式を中心とした「文化理解」が主軸となっていることである。

最後に、学習方法として、子どもたちが日常生活の中における経験・体験に基づいて、問題解決学習、探求学習、自主的学習、協同的学習などを自主的に行うことができるような方法を重視しようとしたことである。そのため、子どもたちの実生活に根ざした関連内容を選定し、それをまた、家庭、学校、故郷、祖国、世界という生活領域の拡大によって配列するといった、子どもたちの発達段階に合わせたカリキュラムの編成が意図され、その中で、地球的課題の探求、問題解決・社会参加力などの育成を重視しようとしたことである。

一方、国際理解教育の課題として、まずその内容が依然として愛国主義、本国理解中心、国際情勢に対する理解などが中心とし、中国の伝統を重んじていることがうかがえる。そのため、「多文化理解」と「自文化理解」と葛藤は見逃すわけにはいかない。この葛藤は、「何を教えるか」という内容選択に直接影響を与えらると思われるが、特に、祖国愛、民族の誇りと外国、異文化との関係性において顕著に現れるであろう。例えば、「人権、正義、公正」などの概念の扱い方や内容の枠組みの設計と、これらの概念に対するカリキュラムの「意図するところ」との関係性の分析が今後の課題となると考えられる。そのためには、教科書のみならず、実際に授業を行っている教師の考え方や彼らのために作成された「教師用指導書」などをより深く分析する必要があると思われる。

次に、「意図されたカリキュラム」の実施の結果といった実践授業の研究を行うのも今後の課題として指摘できよう。それは、まず選ばれた内容がどのような概念で、どのように表現されているのか、また、それはどのような方法で教えられているのかなど、実際の実践授業に関する考察や分析を行うことは、「何がどのように教えられているか」がより把握できるので、重要な意味を持つからではなかろうか。

最後に、国際理解教育を取り巻く環境とその実践に影響を及ぼす諸要因との関わりをどううまく対処していくのかも考えるべきであろう。特に、従来からの科挙の伝統や入試試験対応型教育を背景に、「非試験科目」として見なされているいわゆる「副科」としての「品德と社会」が、子どもや教師および保護者に必ずしも重視されなければならないとは言い難いのである。

以上を含めて、「地球的市民の育成」という新たな考え方をもって、今世紀からますます重視されている

中国の国際理解教育は様々な面で多くの課題を抱えており、今後の進展に注目していきたい。

【注】

- 1) この時期、「国際主義」は社会全体にわたって提唱されていた。同時、「国際主義者」あるいは「国際主義戦士」という言葉がよく使われていたが、その主な人物として、羅盛教、黄継光、毛岸英、そしてペチューンなどが挙げられる。これらの人物は、異国での「反帝国主義」戦争の中で「尊い命を捧げた戦士」として全国で知らない人がいないほど徹底的に宣伝されていた。一方、学校では、主に「政治」「歴史」「国語」などの教科が愛国主義教育と「国際主義教育」の担い手となっていた。
- 2) この国際理解教育カリキュラムは、教師研修機関である北京教育学院が2001年から始まった「国際理

解教育に関する研究」という課題研究の中で、2004年に北京市を中心として開発した地方カリキュラムである。本カリキュラムは、小学校4年～5年、中学校7年～8年を主な対象として開発されている。

- 3) この表は、イギリスウェルズ大学の翁文艶の論文「国際理解教育カリキュラムの構築」により整理したものである。
- 4) 中国教育部『語文課程標準』北京師範大学出版社、2001年、p.4 及び中国教育部『芸術課程標準』北京師範大学出版社、2001年、p.8。
- 5) 中国教育部『品德与社会課程標準』北京師範大学出版社、2002年、pp.2～3。
- 6) 同上書5), p.5。
- 7) 中国教育部『品德与社会課程標準』北京師範大学出版社、2002年、pp.5～6を参照。
- 8) このテーマについて、表9では省略している。
(主任指導教員 小原友行)